

第66回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会参加報告

杉 山 雅 宏

1. 日 時：平成28年8月25日（木）・26日（金）

2. 会 場：北海道教育大学札幌校

3. 参加者：佐俣紀仁・木戸紗織・杉山雅宏

4. 内 容

（1）基調講演「教学マネジメントの確立」

北海道教育大学 学長 蛇穴 治夫

（2）分科会

1）第一分科会「高等教育における人材育成

ー大学の国際化と人材養成プログラムー」

2）第二分科会「革新的な教育の取り組みとその成果

ーアクティブラーニングなどの取り組みを通してー」

3）第三分科会「学士課程教育の新たな評価

ーステークホルダーなどの多様な視点からー」

（3）事例報告「教学IRの組織的導入とカリキュラム改革」

北海道大学高等教育推進機構 教授 細川 敏之

5.報告事項

（1）研修会参加者は138名だった。

（2）分科会は、第1分科会に木戸紗織、第2分科会に杉山雅宏、第3分科会に佐俣紀仁がそれぞれ参加した。

（3）第2分科会では、杉山が「講義を通じた温かい人間関係作りの実践」をテーマに、本学における薬学部大学基礎論の取り組みについて話題提供をした。話題提供の要旨は以下のとおりである。

<話題提供要旨>

1. 問 題

薬学部の現状を簡単にまとめると以下ようになる。

- 1) 資格取得目的のため、座学はハードである。進級条件も厳しく、年間5科目以上の不合格科目で原級留め置きとなる。
- 2) 同級生は同一カリキュラムをこなす均一集団で、個人の自由度は低い。「同一メンバー」が「同じ場所・教室」で「長時間」生活を共にする。さらに、クラスは4年間固定である。
- 3) 失敗は許されない雰囲気があり、常に実習・試験に追われる。試験ごとに順位を出すため仲間は“ライバル”であり、「勝った」「負けた」の心理が根底にある。
- 4) 実習先では、社会化された行動が求められる。

このように、近い関係であるがゆえに、人間関係に歪みが生じやすい。

2. 目 的

大学で学ぶべきことは、現代科学の成果を身につけることであるが、それだけではない。自分たちが専門と定めたことを学ぶとともに、人生とは何かについても考える必要はある。学問との出会い、教員との出会い、友だちとの出会いなどを通じ、人間形成を身につけることが当然期待されている。

- 1) みんな同じ目標（国家試験合格）をもった仲間なのだから、お互いを尊重し、協力し合う、助け合うようにできることが望ましい。
- 2) 「あなた方がお相手する患者さんは困っているのです」という優しいまなざしで声掛けができるようにならないと、患者対応等が将来難しくなる。日ごろから仲間に対しても実践することが大切である。
- 3) 自分一人では仕事ができない（たとえば、チーム医療）。仲間を尊重し、協力し合うことが大切である。

- 4) 私たちは支えられて生きているのだから、「ありがとうございました」と自然に言えるようにしたい。

学生が主体的に学べる講義を提供し、自己を見つめ、他者を思いやり、自己の生き方を考える機会を提供し、課題解決を図る必要がある。こうした講義を入学直後に仕組むことで国家試験合格という共通の目標を持つ仲間が支えあい、助け合うことで学習へのモチベーションは高まるのではないかと考えた。

3. 講義の概要

1年前期開講科目『大学基礎論』に、協同学習を組み込んだ。協同学習を効果的に運用するため、互恵的な相互依存関係（役割分担）、十分な相互交流（グループを固定しない）、明確な個人の役割（ワークシートへの記入）、社会的技能の活用（明確な意思表示）、活動の振り返りなどの条件を取り入れた。

(1) 違いを分かち合う学習活動（グループ単位）

自分で考え、自分の考えを仲間に伝える。仲間の考えを聴き、改めて考える。グループごとの考えをまとめ、全体でシェアする。

(2) 仲間を認める・励ます学習活動

仲間の発言はしっかり聴く。拍手で励ます。課題の採点・添削は仲間が行い、励ましのメッセージを添える。

(3) 新聞学習（グループでの共同作業・ポスター作成）

各自が持ち寄った新聞記事を各自紹介。持ち寄られた記事の特徴をまとめ、他のグループに紹介する。

(4) キャリア教育

仲間とともに、10年後の自分をイメージし、伝えあう。その他、価値分析、マイマップ作り。

(5) 活動の振り返り

毎時間、自己や他者を見つめ、互いを励ましあうための振り返りを、振り返りシートを用いて行った。

(6) 全学をあげての取り組み－教員へのインタビューについて－

大学基礎論の学習課題は、「大学で学ぶことの意義の探求－大学生の今と昔－」である。講義の最終目標は、「大学生として自分たちに何ができるか、これから何をしなければいけないのか」（どのような医療人を目指すか）を、学生同士が共に考え、発表用レポートにまとめることである。この講義の運用は、本学教養教育センター教員が担当するが、科目の性質上、全学をあげて取り組むこととなっており、薬学系教員には、学生のこれからの薬学での学習への動機づけを高める一助になればという観点から、学生からのインタビューに応じるという形で協力を依頼した。

(7) 課題

学習習慣を身につけさせるために、毎時間簡単な課題を課し、翌週提出を義務づけた。課題提出の確認については、学生の自治に委ねた。

4. 講義の手法

(1) 各クラス5～6名のグループを形成し、グループ単位の活動とする。

グループは固定せず、半期で8回シャッフルする。多くの仲間と触れ合えるようにすることがねらいである。

(2) 教師が学生に質問を投げかけ、回答を促す双方型講義法に、チーム基盤型学習法を融合した形をとっている。これは、一人で考えるだけでなく、仲間と一緒に考える、仲間の考えを聴く、わからないことは仲間から学ぶ姿勢を身につけさせることをねらいにしている（協同学習の理論：パークレイら、2009を参考）。

5. 方 法

レポート課題「大学基礎論での学び・気づき」について、主担当1クラ

ス（50名）を取り出し、質的分析を行った。記述内容を丁寧に読み、学習内容ごとの記述を取り出した。キーワードを拾いカテゴリー別に分類した。分類では、協同担当者3名の協力を得て、意見の一致したものをカテゴリーとした。尚、研究の主旨・個人情報の取り扱い、研究成果の公開方法を学生に説明し、同意を得た。

6. 結 果

「ポスター作成」では「協働」「仲間からの学び」「役割分担」などのカテゴリーを抽出した。「違いを分かち合う学習活動」では、「気遣い」「思いやり」「親近感」「聴く態度」などのカテゴリーを抽出した。「キャリア教育」では、「他者からの指摘」「自己理解」「他者理解」「人との関わり」などのカテゴリーを抽出した。

7. 考 察

（1）学生同士の学びあいを仕組む

大学基礎論では、いかにして学生同士の学びあいを仕組むかに神経を注いだ。学生同士が学びあう対話を中心とした講義を展開することが、「仲間の存在」を意識させ、「仲間からの学び」を促し活動性を高める。学生を孤立させるのではなく、学生同士をつなぎ、互いに学びあえる場を演出することが大切である。互いが「気遣い」、協力しなければ解決できない活動を仕組むことにより、学びあい、教えあい、励ましあうことの素晴らしさを学生は実感することができる。

グループに分けて活動させればそれでよいということではない。ともに学ぶことの意味と具体的な方法を伝えていく必要がある。講義では、まずは自分で考え、仲間に考えを伝え、仲間の意見に耳を傾け、改めて自分の考えを確認したり、新しい考えを附加したりする活動を展開した。大学基礎論では、学生が自分自身の学びと学習仲間の学びを最大にするために、基本的な信頼関係構築を目指し、集団のサイズを5～6人とし、グループ

を固定化せず、多くの仲間と触れ合い、学生に認知と態度の同時学習が可能となるよう模索した。

学生が仲間と学びあう一方で、教材についての知識や理解を深めることが可能になる。また、他方で、共に学びあうという協同の精神が涵養され、学習に対する動機づけが高まり、学習や大学についての見方も好転し、仲間についての理解も深まり、仲間を大切にするという人権感覚も高まる。講義では、振り返りシートを活用し、自分が頑張った点だけでなく、仲間が頑張った点も必ず毎回、振り返りシートに記入するようにさせた。そこには、「すんなりとアポ係を引き受けてくれた二人に感謝」、「一人だけ反対意見だったので、少しでも自分の考えを伝えられるように努力した。仲間がしっかり聞いてくれてうれしかった」、「グループのみんなから、様々な指摘やほめ言葉をもらえてうれしかった」、「進行係として、スムーズに意見交換できるような空気を作れるように頑張った」、「進行係さんが、グループのみんなが積極的に意見交換できるような雰囲気を作ってくれた」など、協同の精神が涵養されたことがわかる記述が多くみられた。

（２）人の存在を意識させる

学生は改めて“人”を意識するようになったことは、「はじめはとても不安だったが、出席番号の近くない人とも、この講義を通じて仲良くなれた」「異なる価値観に触れ、自分の中により多くのものの見方を培うことができる。学習活動を通じて、様々な人と関われたのは貴重だった」などの感想からもわかる。

「模造紙にまとめる作業は、時間との戦いだった。はじめは、時間内に終わらないこともあった。しかし、回数を重ねるたび、“誰がどの部分を考える、その間に、誰が模造紙に記入する”などの役割分担が上手にできるようになった。そして、折り紙など装飾品を作る余裕までもてるようになった。このように、数人で1つのものを完成させるには、仲間に対する

配慮が必要であることを学んだ。これから先の実習や将来のチーム医療で、この体験を活かしたい」という感想からは、仲間がいるからこそできた、改めて仲間を大切にすることの必要性への気づきが伝わってくる。

人の存在を意識すれば、一人でできないことも協力してできる。このような当たり前のことにあえて気づかせることも必要な試みであるかもしれない。

(3) 教員との交流について

多くの薬学系教員は、入学して間もない時期に新入生と触れる機会は少ない。そのような状況下で、入学直後の学生と、講義という硬い場でないところで、さりげなく交流できたことは、教員にとっても貴重な体験であった。

学生からの感想にも、「入学してすぐのころであったため、先生と話すのは初めてのことで、だからこそ、1つ1つのことがとても印象に残った。特に、“大学の勉強は受け身ではなく、積極的に自ら求めていくことが必要だ”とおっしゃっていたことが印象に残っている。前期の講義が終えた今、その必要性が少しわかったような気がするし、また、これからの6年間、日々、意識し続けるべきことだと思った」など、教員へのインタビューに対する前向きな意見が多かった。

医療の対象は、長い歴史と文化の記憶を背負いつつ、社会的な様々な関わりの中で日々の生活を営んでいる人間である。豊かな人間性と他者に対する温かい想像力を持ち、医療現場で課題を自ら発見し、患者のために、仲間たちと気持ちよく仕事をしていくことができる薬剤師を育てることが、薬学系教員の第一義的課題である。ゆえに、薬剤師として求められる基本的な資質、「患者を思いやる視点をもつ」「高いコミュニケーション能力をもつ」「チームで連携する大切さを認識する」「物事を総合的な広い視野に立って判断できる」「探究心・研究心を持ち自己研鑽を重ねる」等ア

クティブに学び、生活していく基礎的素養を身につけるための礎を提供することは、どこかで伝えなくてはいけないと思いつつも、国家試験合格を最優先課題とする現状では、手を付けたくてもなかなか着手できない重要課題であった。

時間的な制約もあり、各グループ1教員という限定であったが、可能であれば、1グループ2教員程度の訪問ができれば、程よい緊張感の中で、奥深いコミュニケーションワークを体験できるのではないかとも思った。

【参考文献】

参考文献：パークレイ、E・F.クロス、K・F.メジャー、C・H. 協同学習の技法：大学教育の手引き 安永悟（監訳） ナカニシヤ出版

フロアーより、グループ活動を通じて、学生間の人間関係作りにどのような変化が起きたか、学習への動機づけが高まったか、など多くの質問があった。

6. 次回開催校：東北大学